

2014年10月26日「美しい言葉」

＜ 聖書箇所 ＞ 「ヤコブの手紙 3章2節～10節」

わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである。もし、言葉の上であやまちのない人があれば、そういう人は、全身をも制御することのできる完全な人である。馬を御するために、その口にくつわをはめるなら、その全身を引きまわすことができる。また船を見るがよい。船体が非常に大きく、また激しい風に吹きまわされても、ごく小さなかじ一つで、操縦者の思いのままに運転される。それと同じく、舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる。あらゆる種類の獣、鳥、這うもの、海の生物は、すべて人類に制せられるし、また制せられてきた。ところが、舌を制しうる人は、ひとりもない。それは、制しにくい悪であって、死の毒に満ちている。わたしたちは、この舌で父なる主をさんびし、また、その同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている。同じ口から、さんびとのろいとが出て来る。わたしの兄弟たちよ。このような事は、あるべきでない。

＜ 説教抜粋 ＞ 「美しい言葉」

今日の説教の題名は、「美しい言葉」です。聖書では、ヤコブの手紙3章2節～10節です。今日は、拝読箇所を四箇所に分けて考えたいと思います。「わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである。もし、言葉の上であやまちのない人があれば、そういう人は、全身をも制御することのできる完全な人である。」この箇所は問題提起です。

つまり、私たちはどのような存在であるのかということが提示されています。私たちが犯しやすいあやまちが、言葉の上のあやまちだということが書かれています。人と人とのコミュニケーションには「言葉」というものを欠くことができません。人間関係を深めて行くのも、逆に、関係を切ってしまうのも、たった一つの「言葉」がきっかけになる場合があります。

たとえば、何十年も前に掛けられた一言を今も忘れることができないという人がいます。次の箇所には、具体的なたとえ話が書かれています。「馬を御するために、その口にくつわをはめるなら、その全身を引きまわすことができる。また船を見るがよい。船体が非常に大きく、また激しい風に吹きまわされても、ごく小さなかじ一つで、操縦者の思いのままに運転される。」。

ここには二つのたとえ話が書かれています。これは次の、「舌」もしくは「言葉」というものを説明するための導入です。続いての箇所は、次の部分です。「それと同じく、舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる。あらゆる種類の獣、鳥、這うもの、海の生物は、すべて人類に制せられるし、また制せられてきた。ところが、舌を制しうる人は、ひとりもいない。それは、制しにくい悪であって、死の毒に満ちている。」。

この箇所には、「舌」が持つ影響力が非常に大きいということの説明です。たとえ大きな船であったとしても小さな舵一つで方向性を定めることができます。それと同じように、私たちは「言葉」一つで、自分自身の方向性を決することができます。

範囲を広げれば、たとえば、政治家であれば、「言葉」一つで国の方向性を決することができます。「言葉」というのは、一度話すと、再び元に戻すことはできません。話す一言に重みがあるのか、それとも重みがないのか。時には、苦しんでいる人が、たった一言の「言葉」で救われることもあります。

このように一つの「言葉」が、時には人の命を生かし、時には殺してしまう力を持っているのです。では、三番目の箇所です。「わたしたちは、この舌で父なる主をさんびし、また、その同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている。同じ口から、さんびとのろいとが出て来る。」。ここには、実際に、「舌」を私たちがどのように扱っているかが書かれています。

私たちは、ともすれば、二つ心をもって舌を用いている場合があります。「言葉」は、その人の心の姿を反映します。二枚舌を使う人は、その人が二つ心であるということを指しています。私たちは、あるときには父なる神様、主を賛美しますが、別の時には、同じ舌で、神様がつくった人間を呪ってしまう場合があります。

最後の箇所です。「わたしの兄弟たちよ。このような事は、あるべきでない。」。ここで初めて薦めの言葉が書かれています。この手紙の著者であるヤコブは、この手紙を書いた時に、どのような状況に直面していたのでしょうか。もしかしたら、偽善が蔓延しているような状況だったのかもしれませんが。表では素晴らしい言葉を語りながら、裏では呪いの言葉を吐いていたとすれば、そこに真実はあるのでしょうか。

ヤコブの手紙は約 2000 年前に書かれました。しかし、ヤコブが書いた話は現在にも通じ

る話です。今日の説教の題名は、「美しい言葉」という題名です。美しい言葉の背後には、本来は、美しい心がなければなりません。しかし、もしかしたら、私たちが使う美しい言葉の背後にはそうでない心があるかもしれません。